

好奇心を持ち、探究する活動を楽しむ子どもの育成

— 物の性質や仕組みに興味・関心を持つ環境構成と援助の工夫を通して —

浦添市立浦添こども園 比嘉 恵秀

【要約】

本研究は、子どもの興味や関心を把握し、環境構成と援助の工夫をすることで、物の性質や仕組みに気づき、探究する活動を楽しむ子どもの育成を目指したものである。

キーワード □好奇心 □物との関わり □物の性質や仕組み □探究を楽しむ

I テーマ設定理由

近年の社会の急激な変化を受けて、人々の価値観や生活様式が多様化している。少子化、核家族化が進行し、子ども同士が集団で遊びに熱中し、時には葛藤しながら、互いに影響し合って活動する機会が減少するなど、様々な体験の機会が失われている。また、都市化や情報化の進展によって、子どもの生活空間の中に自然や広場などといった遊び場が少なくなる一方で、テレビゲームやインターネット等の室内の遊びが増えるなど、偏った体験を余儀なくされている。身体を使って体験することや考えたり、工夫すること、共通の目的に向かって人と協同していくなどの実体験は、これからの社会に必要な資質能力として重要である。

平成29年に3法令（幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領）の改訂により、内容の共通化が図られ、幼児教育において育みたい資質・能力が明確となった。幼児期における教育及び保育の基本を踏まえ、小学校以降の子どもの発達を見通しながら、教育及び保育活動を展開し、資質・能力を育むことが大切とされている。

幼保連携型認定こども園教育・保育要領の総則では、保育は「環境を通して行う」ものであることが明示されている。子どもが心を動かされるような環境を保育者が子どもと共に構成し、それらの環境の中で、子ども一人ひとりがそれぞれのかかわり方で環境に関わっていく。そうした環境への関わりを通して、子どもたちは発達に必要な経験を積み重ねながら、生きるうえで必要な力を身につけていくのである。そして、教育・保育要領の第2章の第3節「環境」の領域では、「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活の中に取り入れていこうとする力を養う」とあり、その内容の一つに「生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ」とある。

現在のクラスの実態として、戸外遊びの砂場、水遊び、虫捕り、ブランコなど興味を持って活動を楽しんでいる。砂場では、砂、水、道具を使ってどのようにして水を流していくのかという遊びや、室内では積み木を使ってビー玉転がしをするなど、物質が流れていく仕組みに興味や関心を持っている。物を使った様々な遊びに興味を持ち、好奇心を持って遊ぶ姿が見られるが、物を組み合わせたり、試行錯誤していくことに課題がある。それは、私自身がどのように遊びこめるか、必要な物を用意することや遊びの空間の設定の仕方などの環境構成が十分でなかったと考えられる。

そこで、子どもの興味や関心を把握し、豊かな体験ができるよう意図的、計画的に環境構成を行っていく。そして、サークルタイムや掲示物などを通して互いの考えを伝え合ったり、見通しや振り返りをしていくことで、遊びに広がりや深まりが見られ、探究する活動を楽しむ姿が見られると考える。

以上のことより、本研究では、子どもが物の性質や仕組みに興味や関心が持てるような環境構成や援助の工夫をしていくことで、好奇心を持ち、探究する活動を楽しむ子どもの育成ができるのではないかと考え、本テーマを設定した。

II めざす子ども像

身近な環境に自ら関わり、物との触れ合いを通して探究する活動を楽しむ子

III 研究目標

好奇心を持って物と関わる中で、物の性質や仕組みに気付き、探究する活動を楽しめるよう環境構成や援助について研究する。

IV 研究仮説

1 基本仮説

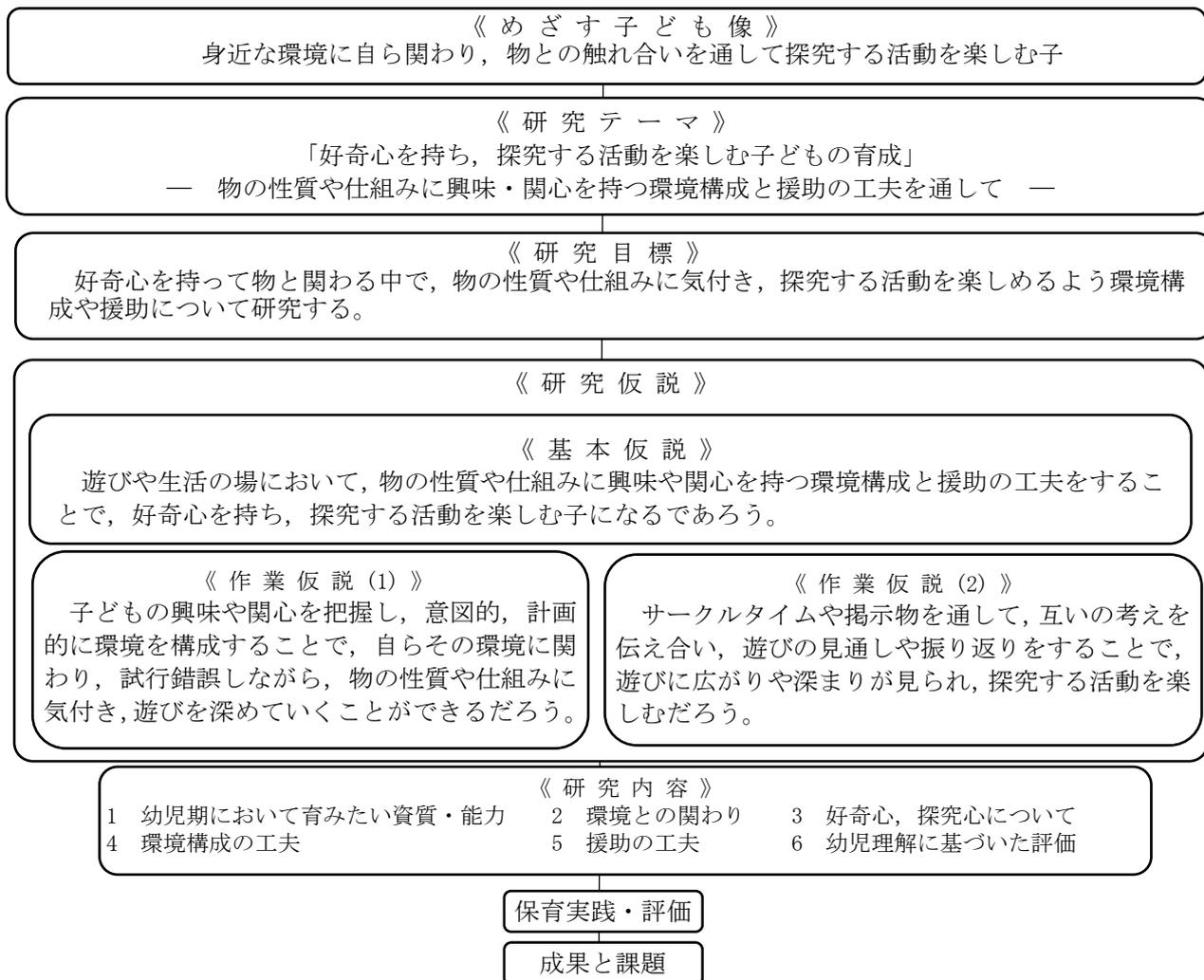
遊びや生活の場において、物の性質や仕組みに興味や関心を持つ環境構成と援助の工夫をすることで、好奇心を持ち、探究する活動を楽しむ子になるであろう。

2 作業仮説

(1) 子どもの興味や関心を把握し、意図的、計画的に環境を構成することで、自らその環境に関わり、試行錯誤しながら、物の性質や仕組みに気付き、遊びを深めていくことができるだろう。

(2) サークルタイムや掲示物を通して、互いの考えを伝え合い、遊びの見通しや振り返りをすることで、遊びに広がりや深まりが見られ、探究する活動を楽しむだろう。

V 研究構想図



VI 研究内容

1 幼児期において育みたい資質・能力

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説(以下、教育・保育要領解説とする)において、「園生活全体を通して、園児に生きる力の基礎を育むことが求められている」と示され、幼児期に求められる資質・能力として、「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性」が挙げられている。これらの資質・能力は遊びを通しての総合的な指導において育まれるものであるとし、筆者が図1にまとめた。

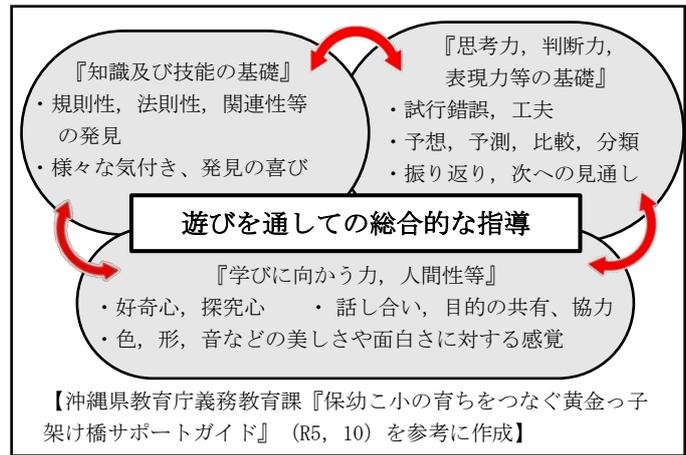


図1 幼児期において育みたい資質・能力

本研究においても幼児期において育みたい資質・能力を踏まえながら指導計画を立て、子どもが周りの環境に興味を持って関わり、特徴を見出し、さらに関わろうとしていくという、遊びを通しての総合的な指導が大切だと考える。

2 環境との関わり

(1) 領域「環境」について

教育・保育要領解説において、「園児の周囲には様々なものがあり、これらの環境に好奇心や探究心をもって主体的に関わり、遊びや生活の中に取り入れていくことを通して発達していく」とある。環境の内容の一つに、「様々な物に興味を持って繰り返し遊んでいくうちに次第にその性質や仕組みに気づき、物との関わりが深まる」とあり、保育教諭は、環境の中にある物の特性を生かし、子どもの興味や関心を引き出せるようにしたり、保育教諭自身も一緒に遊び、個に応じた援助をすることが大切であると述べられている。

このように、子どもの興味や関心が持てるよう環境を構成し、その物との関わりを楽しみ遊び込んでいく中で、扱い方を知ったり、考えたりするなど、物の仕組みや性質に気づきを広げることが大切なことであり、保育教諭の子どもに寄り添った援助も重要であると考え。このことから、子どもが好奇心や探究心を持って様々な環境と関わり、豊かな体験ができるようにするためには、環境構成や援助の工夫、それを支える保育教諭の意図的な関わりが重要になると考える。

(2) 物的環境

高山(2021)は、保育の環境構成は保育教諭が専門的知識に基づいて行う行為だと述べ、保育環境の要素の一つとして「物」をあげ、素材の理解や道具の重要性について知ることが大切だとしている。子どもの年齢、発達、これまでの経験によって遊びの内容は個性があり、環境構成を行う際には素材と道具の理解が重要だと捉える。砂、水、土、草などの応答性に高い自然素材や、スコップやバケツなどの素材に働きかける道具によって遊びは広がっていくとあることから、子どもは繰り返し遊んでいく中で、素材の性質を知り、道具の扱い方や特性を学んでいくと考える。

よって、本研究では素材や道具の性質や多様性について理解し、環境構成をしていくことで、好奇心を持ち、探究する活動を楽しむ子になるだろうと考える。

(3) 子ども自身の物との関わり方

教育・保育要領解説において、子どもは身近な環境に好奇心をもって関わる中で体験したこと

を違う形や場面で活用し、新たな使い方を見付けようとする示されている。このように、保育者が意図的に置いた物でも、子どもは想定外の使い方をしたり、子どもなりの感性で扱ったりすることからも、その姿を肯定的に捉え、子ども自身が物と関わりながら色々な方法を見出す力や新しい遊び方の発見が、その物の魅力や多様性を広げていくと考える。

そのことより、本研究では、一人ひとりの感じ方、物への多様な関わり方によって、物の性質や仕組みに気づき、遊びに広がりや深まりが出てくると考える。子どもの発想を大切に、保育教諭自身も一緒になって面白がり、遊びこめるようにしていきたい。

3 好奇心、探究心について

(1) 幼児期の好奇心、探究心について

教育・保育要領解説では、幼児期の思考力の芽生えとして、探究心をもって考えたり試したりする経験は、主体的に問題を解決する態度へとつながっていくとしている。秋田(2024)は、幼児期の探究心について「人は興味深いことに対して心を動かされると、それを探究してみたいくなる特質を本来的にもっている」と述べている。美しいもの、神秘的なものに目をみはる感性や様々なことに興味や関心を持って周りの世界を見て感じていく姿や、もっと知りたい、もっとこうしてみたいという学びへの欲求も幼児期ならではであると考える。

また、宮里(2023)は、物の特徴や仕組みについて考えることは科学的な思考の芽生えとなり、探究への意欲となると述べ、各年齢の発達段階について捉えることと援助の工夫が大切だとしている。宮里(2023)を基に、各年齢の思考力の芽生えの発達について筆者が表1にまとめた。

表1 各年齢の発達

年齢	思考力の芽生え
3歳児	新鮮な思いで身近な環境と出会い、手で触れたり、体全体で味わったり、感じ取っていく時期。面白いと感じたことを繰り返し楽しむ中で、ためこまれた実感がその後の探究的なかわりを支える。特に、3歳児の頃は全身を使って存分に遊ぶ体験が大切。
4歳児	友達との関わりが広がり、言葉を交わしながら遊びを進めていくようになる。他者との共感的な在り方を基盤としながら、一緒に考えたり、自分の意見を伝えるようになる。自分だけで考えていたところに友達が加わることで、思考し合う姿が見られる。
5歳児	身近な環境と関わる中で、知識や考えを見出した体験が知的探究心を引き起こし、より積極的に環境に関わるようになる。友達の考えに触れることで刺激を受け、育ち合いにつながる。

このように、各年齢の発達を踏まえながら今の子どもの姿を捉えていくことで、どのような物を置けばよいのかという環境構成の工夫や、丁寧な援助ができると考える。本研究では、好奇心をもち、様々な物との関わりを通して、物の性質に気付いたり、考えたり、予想したりすることで、もっとよりよいものにしたいという気持ちになり、探究する活動を楽しむのではないかと考える。

(2) 探究を支える保育教諭の役割

汐見(2017)は、「保育者の役割は『整理、言葉化、共有、深化』などを手伝えることにある」と述べており、保育教諭の人的環境や援助の面においても、保育教諭の役割が大切なことが分かる。保育教諭が子どもの遊びが広がらない際に、考えを整理したり、言葉に出せるよう問いかけてみたり、困ったことや感じたことを周りの友達と共有するなど、意識的に行うことで、探究する活動を楽しめるのではないかと考える。秋田(2024)は、探究の始まりや行動していく過程には様々な気づきがあり、気づきには多様な質があるとし、筆者が表2にまとめた。

表2 つぶやきと気づきの質

子どもの姿	つぶやき	気づきの質
興味 関心	おもしろい、あれ？ なんだろう？	驚きや疑問や不思議など今までと違う事実に出会う
	なるほど、あっそうか ～と同じ ～みたい	新たな知識や情報を得て、それまでの知識とつながる より詳細に丁寧にみる、見比べることで気づく
疑問 試行錯誤 伝え合う	なぜだろう？ どうして？	やってみて、疑問が生まれる
	～かもしれない こうしたらいいかな	予想する、想像する、比較する
	～してみたい ～してみよう	自分のイメージに近づけようと試す、工夫する、伝える 他者の考えを取り入れる
	こんなこともできそう	新たな方法への気づきや見通しによるシミュレーション
振り返り 満足感 次への意欲	こういうことか ～だからこうなんだ	振り返りを通しての新たな見方や自分自身の見方の特徴への気づき
	もっとこうしてみたい	こんなことができるのでは？と対話などから着想を得る

このことから、子どものつぶやきを拾い、気づきの質を見取っていくことで、環境構成や援助の工夫ができ、好奇心や探究心を持って活動を楽しめるのではないかと考える。

4 環境構成の工夫

(1) 環境の再構成

教育・保育要領解説において、保育教諭は園児の活動の流れや動きに即して、常に適切なものとなるように、環境を再構成していかなければならないとしている。大豆生田(2018)は、環境の再構成について「環境構成は、前日に行うばかりでなく、保育の真ただ中でも行う。子どもの興味の方向性によって、急遽、別の環境を準備したりもする。そうした子どもの興味や関心を把握することで保育が展開していく視点が大事だ」と述べている。

このように、子どもが興味を持つのではないかと予測し、素材や道具を用意したり、子どもの気づきや遊びの工夫を取り入れ、遊びこめるように活動の時間を確保したり、片付けをした後も続きができるよう場所を整えるなど、子どもの姿に合わせて環境を再構成していく。本研究では、探究する活動を楽しむためには、子どもの願いや思いを大切に、子どもと一緒に対話をしながら再構成をしていくことで遊びが発展していくと考える。また、遊びの中で試行錯誤したり、考えたりするには、継続的で発展的な活動ができる環境を意図的に残すことも大切である。そうすることで、遊びが広がり、つながり、深めることができると考える。

(2) 視覚的な環境構成

大豆生田(2018)は、学びが生まれてくるためには、視覚的な環境が大切だと述べている。大豆生田(2018)の可視化の方法を筆者が表3にまとめた。子どもが興味を持ったことを写真で貼り出すなど、情報を共有することも重要な環境構成だと考える。例えば、素材や道具を扱っていく中で、ごっこ遊びや製作に取り入れたりするだろう。それを掲示することで、子どもの意欲や、試行錯誤、新たな問いにつながっていくと考える。色々な方法を用いて視覚的な環境を整え、環境の再構成していくことは、子ども同士、子どもと大人との対話が生まれ協同的、探究的な学びにもつながる。このように、遊びが探究的な学びになっていくためには、可視化を通して対話が深まることが重要で、保育者の整理の仕方が、子どもの「学び方を学ぶ」ことにもつながり、色々な可視化の方法が互いの考えを伝え合うことや遊びの振り返りに有効だと考え、手立てとして取り入れていく。

表3 可視化の方法

<ul style="list-style-type: none"> ・写真 ・絵 ・実物 ・グラフ ・地図 ・カレンダー ・設計図 ・分類 ・ウェブ化

5 援助の工夫

(1) 応答的な関わり

教育・保育要領解説において、保育教諭の役割として「保育教諭等は園児と関わる中で、園児の感動や努力、工夫などを温かく受け止め、励ましたり、手助けしたり、相談相手になったりするなどして心を通わせながら、(中略)きめ細かな対応をしていくことが大切である」としている。また、佐伯(2013)は、子どもがモノと対話すること、いろいろなモノと丁寧に触れることを繰り返すことが大事だとし、「ともにみる」「その子になってみる」という大人の存在が大事だと述べている。

このことから、側にいる保育教諭が子どもの興味を持っていることに、一緒に目を向け、試行錯誤する姿を見守ったり、困っている時に一緒に考えたり、寄り添っていくことが本研究においても、遊びこんでいく中で物の性質や仕組みに気づき、遊びを深めていく援助ができると考える。

(2) 色々な考えを知り、深める「サークルタイム」

大豆生田(2022)によると、「クラス集団などで輪になって対話を行う活動」をサークルタイムと言い、「サークルタイムの場は、子どもの多様な声を聴く場である」ことが大切であると述べている。子どもの主体性を尊重する協働的な学びにおいては、保育教諭を含めた子ども同士の対話が重視されている。サークルタイムを取り入れていくことで、色々な気づきや試行錯誤したことを自分なりの考えを伝えていく楽しさを感じるであろうと考える。また、友達の思いや考えを聞くことで、自分の考えと共通することを知ったり、違う考えを聞いて新しく気付くことで、自分の考えをよりよいものにしようとしたりするだろう。遊びの見通しや振り返りをしていくことで、次の活動への意欲となり、遊びに広がりや深まりが見られ、探究する活動を楽しむことにつながると考え、手立てとしていく。

6 幼児理解に基づいた評価

文部科学省『幼児理解に基づいた評価』によると、幼児を理解するとは、一人一人の幼児と直接触れ合いながら、幼児の言動や表情から、思いや考えなどを理解しかつ受け止め、その幼児のよさや可能性を理解しようとする事としている。

また、保育の評価とは、保育のなかで幼児の姿がどのように変化しているかを捉えながら、そのような姿が生み出されてきた様々な状況について適切かどうかを検討して、保育をよりよいものに改善するための手掛かりを求める事としている。幼児理解を深める方法は様々であるが、本研究で活用していく方法を表4に筆者がまとめた。

表4 幼児理解を深める方法

方法	効果
指導計画 保育記録	遊びの様子を丁寧に捉えて記録すること、幼児理解を深めていくことができる。日々の記録を振り返り子どもの変化を捉えて自分自身の保育を見つめ直すことが大切になる。
写真、動画	写真や動画を利用することで、その時には気付かなかったことや、子どもの表情、言葉、友達との関わりを思い起こすことで、次の保育の環境を再構成したり、援助の方法を見直すことができる。
同僚との話し合い (リフレクシ ョン)	複数の職員が一人の子ども、あるいは一つの場面の記録を検討することによって、自分自身では分からなかった子どもの気持ちや行動の意味を理解することにつながる。

これらの方法は、よりよい保育をつくり出すために、子どもを肯定的に見る、活動の意味を理解する、発達する姿を捉える、保育を振り返り、指導計画を見直すことに大切であると考え。

本研究では、表4を活用しながら、自分自身の保育を振り返り、子どもを理解することで保育を見直し、次の保育実践に活かしていく。そうすることで、子どもの姿に応じた環境構成と援助がよりよいものになり、子どもが好奇心を持ち、探究する活動を楽しむ子になるであろうと考える。

Ⅶ 保育実践

1 検証保育の全体計画

㊦知識・技能の基礎 ㊧思考力・判断力・表現力等の基礎 ㊨学びに向かう力・人間性等

実践	日程	題材	ねらい	活動内容、関連する資質・能力
1	11/28(木)	・やってみよう！ やってみよう！	<ul style="list-style-type: none"> ・色々な物に興味を持って関わり、使うことを楽しむ。 ・感じたこと、考えたことを伝え合う楽しさを感じる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・砂、水、花、松ぼっくり、空き箱、折り紙、ビー玉などの素材やバケツ、とい、テープ、積み木などの道具を色々な方法で使う。それらと触れ合い、繰り返し遊ぶ。㊦様々な気付き ㊨好奇心 ・色々な物の使い方を知り、面白がり、やってみようとする。㊦様々な気付き ・遊んでいく中で、色々な素材を取り入れたり、自分なりの方法で使ってみようとする。㊧試行錯誤、工夫 ・サークルタイムで、気付いたこと、感じたことを伝えあう。㊧振り返り、次への見通し
2	11/29(金)			
3	12/2(月)			
4	12/3(火)	<ul style="list-style-type: none"> ・どうしたらもっと楽しくなるのかな！ 	<ul style="list-style-type: none"> ・色々な物の使い方に気付き、試行錯誤することを楽しむ。 ・友達と一緒に遊び、お互いの考えを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・色々な方法で使い、試行錯誤していくことで、物の性質や仕組みに気付く。㊧試行錯誤、工夫 ・転がる物の大きさ、重さ、種類や転がりやすい場所を試したり、比べたり、調べる。㊦規則性、法則性、関連性等の発見 ・やりたいことに向かって、じっくり取り組む。㊨好奇心、探究心 ・サークルタイムでは、工夫したこと、困っていることなどを伝えあい、色々な考えに触れる。㊧振り返り、次への見通し ・自分たちでアイデアを出しながら、掲示物コーナーを整えていく。㊧振り返り、次への見通し、比較、分類
5	12/4(水)			
6	12/5(木)			
7	12/6(金) 本時			
8	12/9(月)	<ul style="list-style-type: none"> ・もっとこうしたい、もっと知りたい、もっと伝えたい！ 	<ul style="list-style-type: none"> ・物の性質を知り、色々な遊びに広がり、深まる。 ・友達と意見を出し合って相談し、自分達らしさを発揮して、協同的に遊びを楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・色々な物の性質や仕組みに気付いたことを試していく。㊦規則性、法則性、関連性等の発見 試行錯誤、工夫 ・色々なアイデアが生まれ、素材や道具を工夫し、友達と一緒に試行錯誤し、考えて遊ぶ。㊧試行錯誤、工夫 ㊨目的の共有、協力 ・サークルタイムで、友達の考えに触れ、気付いたことを取り入れようとする。㊧振り返り、次への見通し ・掲示物コーナーでは、作品にタイトルや名前を書いて貼る。分類したり、実物や写真を貼る。㊧振り返り、次への見通し、比較、分類
9	12/10(火)			

2 検証保育

(1) 題材名 「どうしたらもっと楽しくなるのかな！」

(2) 題材として取り上げた理由

本学級では、積み木を使ってビー玉を転がし、勢いを付けるために、高さや長さを工夫して遊んだり、園庭では花や葉っぱを使って色水にして、色が出ることを試しながら遊んでいる。その面白さをより味わうことができるように、興味の持てる素材や道具を用意することで、考えたり工夫したり、もっとよりよいものにしたいという気持ちが持てるのではないかと考え、本活動を設定した。

(3) 物の性質や仕組みに気付き、探究する活動を楽しむ姿を読み取る視点

子どもの姿、気づきの質の表を活用し、好奇心をもって繰り返し遊ぶ中で、物の性質や仕組みに気付いて、遊びに広がりや深まりがあるかを読み取り、環境構成や援助の工夫に生かしていく。

(4) 実践の保育展開

	○子どもの姿 ◇関連する資質・能力(図1より)	◎つぶやき ★気づきの質(表2より)
【実践1・2・3】	『ころころぼーる』 ○ボール転がしに興味を持ち、道具を使ってやってみようとする。 ○どのようにしたらうまく転がるのかを試している。 ◇(思) 試行錯誤, 工夫 ◇(学) 好奇心, 探究心	 ◎「といを置いて、つなげてみよう」「そうか、こうすれば良いんだ」 ★これまでの知識とつながる ★予想・想像・比較
	『ペットボトルアーチェリー』 ○材料を集めて製作を楽しんでいる。 ◇(知) 様々な気づき, 発見の喜び ◇(思) 予想, 予測, 比較, 分類 ◇(学) 好奇心, 探究心	 ◎「作ってみたい!」「どうやったら飛ぶの?」 ★自分のイメージに近づけようと試す, 工夫する
【実践4・5・6・7(本時)】	『ころころぼーる』 ○といを組み合わせ、長いコースを作るにはどうしたらいいのか? ◇(思) 試行錯誤, 工夫 ◇(学) 好奇心, 探究心 話し合い, 目的の共有	 ◎「ここに転がってきたら、こう行くはずだよ」 ★予想・想像・比較 ★自分のイメージに近づけようと試す
	『化石探検隊』 ○虫眼鏡で、石を観察する。 ◇(知) 様々な気づき, 発見の喜び ◇(思) 予想, 予測, 比較, 分類 ◇(学) 好奇心, 探究心	 ◎「これはクラゲ」「この形はサンゴ」 ★新たな知識や情報を得て、それまでの知識とつながる。より詳細に丁寧にみる
	○掲示物を見て、やってみようしたり、自分なりに工夫しようとする。 ◇(思) 予想, 予測, 比較, 分類 試行錯誤, 工夫 ◇(学) 好奇心, 探究心	 ◎掲示物を見て「これ作りたい!」と意欲的。使う道具を自分で準備している。 ★自分のイメージに近づけようと試す ★新たな方法への気づきや見通し
	『さらさら砂』 ○ふるいを使って、細かい砂を集めることを楽しんでいた。 ◇(思) 予想, 予測, 比較, 分類 試行錯誤, 工夫 ◇(学) 好奇心, 探究心	 ◎「サラサラなってきた!」 ★驚きや疑問や不思議など今までと違う事実に出会う ★より詳細に丁寧にみる, 見比べることで気づく
【実践8・9】	『ころころぼーる』 ○といの新しい置き方を試してみると、まっすぐ転がることを発見! ◇(知) 規則性, 法則性, 関連性等の発見 ◇(思) 予想, 予測, 比較, 分類 ◇(学) 好奇心, 探究心	 ◎「斜めに置いたら、真っすぐ、すーって行くんだよ」「ほら、まっすぐ行くでしょ?」 ★新たな方法への気づきや見通しによるシミュレーション

<p>【実践8・9】</p>	<p>『泥団子作り』 ○自分の経験したことを伝えたり、自ら質問して友達の考えを知ろうとする。 ◇知 様々な気付き、 発見の喜び ◇思 試行錯誤、工夫 ◇学 好奇心、探究心</p>		<p>◎今日の楽しかったことを発表する。 「泥団子を作ったよ。ハンカチで拭いたらきれいな丸になるよ」 「分かる！私もやったことあるよ」 「どこで作ったの？」「どこの土？」 「やってみたい！」 ★振り返りを通しての新たな見方や自分自身の見方の特徴への気付き</p>
<p>評価・課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの興味や関心を把握し、意図的、計画的に環境を構成したことで、自らその環境に関わり、物と触れ合い、試行錯誤することを楽しむ姿が見られた。 ・その物を使って遊ぶ嬉しさや疑問、困ったことを、共感したり、言葉を整理したり、一緒に考えたり、友達と考えを共有したり援助をすることで、物の性質や仕組みに気付き、遊びを深めていくことができた。 ・サークルタイムや掲示物の場を設けたことで、自分の考えを伝えていく嬉しさを感じ、伝えたい意欲につながった ・様々な遊びを資質・能力の視点で捉えていった事で、育ちを見取り、次の保育の手立てにすることができた。 		

3 本時の保育実践

保育指導案		
令和6年12月6日(金)8:30~10:00		
あおぞら組 男児14名 女児12名 計26名		
<p>(1)前日までの子どもの姿</p>		
<ul style="list-style-type: none"> ・園庭で、ビー玉転がし装置を作り、どのようにしたら最後まで転がっていくかを試したり、障害物を置いてどうやって転がっていくかということを楽しんでいる。また、目の細かさの違うふるいを使って砂をさらさらにすることを繰り返し試している。 		
<p>(2)本時のねらい</p>		
<ul style="list-style-type: none"> ・色々な物を使って、試行錯誤し、もっとより良いものにしようとする遊びを楽しむ。 		
<p>(3)保育仮説</p>		
<ul style="list-style-type: none"> ・ビー玉、とい、板、コンテナ、ふるい、虫眼鏡、タライなど、興味を持てるような環境構成をすることで、それぞれの物で遊ぶ面白さを味わい、試したり、工夫したり、考えたりすることを楽しむだろう。 ・自分の考えを伝えたり、友達の意見を聞く姿を見守ったり、お互いの意見を整理したり、共有できるような援助を行うことで遊びを深めることができるだろう。 		
<p>(4)教材(道具・素材)について</p>		
<ul style="list-style-type: none"> ・ビー玉などの素材や道具を、用意することで、それぞれの性質や仕組みに気付くのではないかな。コンテナ、段ボール、空き箱など素材に働きかける道具を用意する。 		
<p>(5)展開(実践・本時)</p>		
時間	○活動の流れ ・子どもの姿	◇環境構成 ◎保育教諭の援助
8:15	<p>○朝の会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今日のやりたいこと、昨日の続きの遊びで楽しみたいことを話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎一人ひとりのやりたいことを話し合える雰囲気作りをする。 ◇ボール転がしができる、様々な大きさのボール、木の実、台、板、段ボール、ガムテープ、段ボールカッターなどを用意する。
8:30	<p>○戸外遊び(ボール転がし、砂場、縄遊び)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・色々な用具を使って、コースを作る。 ・友達と一緒にボール転がしで遊ぶ。 ・お互いの考えを伝え合い作っている。 ・砂場でままごとをしている。 ・松ぼっくり、落ち葉などを遊びに取り入れている。 ・花を見つけて、色水を楽しんでいる。 ・遊びが広がり、アイデアがうまれ、必要な道具を取り入れている。 ・片付け 	<ul style="list-style-type: none"> ◇スコップ、バケツ、トイ、カップ、皿、じょうろ、タライなど、砂場で使う道具を用意する。 ◇虫、石、砂など色々な物が観察できるよう虫眼鏡を用意する。 ◎子ども達が作っている姿を見守り、考えを言葉にしたり、お互いに考えを共有できるよう声かけをする。 ◎子どもが考えたこと、気付いたこと、感じたことなどに共感し一緒に楽しさを味わう。 ◎困っている時には、考えを受け止め、一緒に考えたり、励ましていくなどの援助をしていく。 ◎時間をかけて作ったり、あきらめずに解決しようとする姿を認めていく。
11:00	<p>○給食</p>	
13:00	<p>○サークルタイム</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今日の楽しかったこと感じたことを伝えたり、友達の話を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇子どもの様子に応じて、必要な物を準備する。 ◎遊びの振り返りや見直しを持つことで、お互いの意見の共通点を見つけたり、色々な考えに気づけるようにしていく。

(6)本時の遊びの様子 ※◇資質・能力(図1), ★気付きの質(表2)を参照



図2 ビー玉転がしをしている様子

ビー玉を入れていた容器のふたや泥団子、れんがを使って障害物を作っていた。どのようにして、ビー玉をゴールまで転がすことができるのか、試行錯誤している姿があり、また、友達と対話しながら「次はこうしてみよう」と次への意欲が感じられた(図2)。

- ◇知 規則性, 法則性, 関連性等の発見
- ◇思 予想, 予測, 試行錯誤, 工夫
- ◇学 好奇心, 探究心

- ★自分のイメージに近づけようと試す, 工夫する, 伝える
- ★こんなことができるのでは?と対話から着想を得る



図3 虫眼鏡で砂を観察している様子

目の細かなふるいを使い、細かい砂にしていくことに興味を持っていた。虫眼鏡を使うことで、砂の粒の大きさの違いに気付く。道具の特徴に気付き、「どんどんやろう」と話し、繰り返し楽しむ姿が見られた(図3)。

- ◇知 様々な気付き, 発見の喜び
- ◇思 予想, 予測, 比較, 分類
- ◇学 好奇心, 探究心

- ★驚きや疑問や不思議など今までと違う事実に出会う
- ★よい詳細に丁寧に見る, 見比べることで気付く



図4 サラサラの砂と水を混ぜて感動している様子

サラサラの砂に、水を入れてみると「ドロドロなった」と話し、泥遊びに興味を持っていた。

次に、砂を入れてみると、固くなり、砂を足すとさらに固くなる。それから、水と砂を交互に入れ、泥の質の変化を面白がり、繰り返し試していた(図4)。

- ◇知 様々な気付き, 発見の喜び
- ◇思 予想, 予測, 試行錯誤, 工夫
- ◇学 好奇心, 探究心

- ★新たな知識や情報を得て, それまでの知識とつながる
- ★自分のイメージに近づけようと試す, 工夫する, 伝える



図5 サークルタイムで伝え合う様子

サークルタイムで、ふるいを使って、サラサラな砂を集めて、水を入れて、泥になったことを発表した。

泥を入れたペットボトルを紹介し、触って感じたことを伝え合ったり、目の細かさの違いふるいを使って感じたことを伝え合う姿があった。自分の考えを伝えたり、共感してもらうことを喜んでいた。(図5)。

- ◇知 様々な気付き, 発見の喜び
- ◇思 振り返り, 次への見通し
- ◇学 話合い

- ★より詳細に見る, 見比べることで気付く
- ★振り返りを通しての新たな見方や自分自身の見方への気付き

評価・課題

- ・子どもの興味や関心を把握し、意図的、計画的に環境を構成したことで、自らその環境に関わり、物と触れ合い、試行錯誤することを楽しむ姿が見られた。
- ・その物を使って遊ぶ嬉しさや疑問、困ったことを、共感したり、言葉を整理したり、一緒に考えたり、友達と考えを共有したり援助をすることで、物の性質や仕組みに気付く、遊びを深めていくことができた。
- ・自分の考えを伝えていく嬉しさを感じられるよう援助したことで、伝えたい意欲につながった。また、友達の意見を聞くことで考えたり、自分とは違う意見もあると知ることができた。
- ・色々な遊びの中で、資質・能力の育ちを見取ることができた。その様子から、次はどのような環境構成や援助をしていくのか、手立てを工夫していくことが必要となる。

Ⅷ 結果と考察

1 作業仮説(1)の検証

子どもの興味や関心を把握し、意図的、計画的に環境を構成することで、自らその環境に関わり、試行錯誤しながら、物の性質や仕組みに気づき、遊びを深めていくことができるだろう。

(1) 興味、関心をいかした、意図的・計画的な環境構成

子どもの様子を観察し、写真や動画などを利用しながら、言葉、表情から何に興味を持っているかを捉え、環境構成や援助を考え、指導計画を作成した。

実践1, 2では、4人の子どもがボール転がしに興味を持ち、好きな場所にといを運び、遊び始めた。コンテナやカゴを置いて高さをつけることで、ボールが転がるように工夫している姿があった。

そこで、実践4では、といの数も増やし、高さをつけることができるコンテナやかご、台、ビー玉を用意し、子ども自ら手に取ることができるよう環境構成した。その後、ビー玉転がしが盛り上がると、興味を持つ子が増え、10名程の人数で作り出す。色々な道具を使い、コース作りをしている(図6)。「ここには短いといを置くと良いかもしれない」「ホースも置いてみよう」といった会話があり、イメージしたことに向かって試行錯誤する姿が見られた。

実践3では、製作コーナーの素材を使い、A児が「お兄ちゃんに教えてもらったペットボトルアーチェリーを作ったよ」と話していた(図7)。そこで、他児も興味を持つのではないかと考え必要な道具を製作コーナーに用意した。すると、A児のおもちゃに興味を持った子が、製作コーナーから必要な物を取り、ペットボトルアーチェリー作りを始めた。初めはうまく飛ばないが、遊び込んでいくと「どうやったらもっと飛ぶんだろう」「もっと引っ張るといいのかな？」など、持ち方や引っ張り方、飛ばす角度など試行錯誤する姿や、ハサミを使ってストローの長さを変えたり、太さの違うストローを使うなどの工夫をする姿も見られた。

これらのことから、子どもの興味、関心を把握し、保育教諭が意図的に環境を構成したことで、自らその環境と関わり、試行錯誤する姿が見られたと考える。

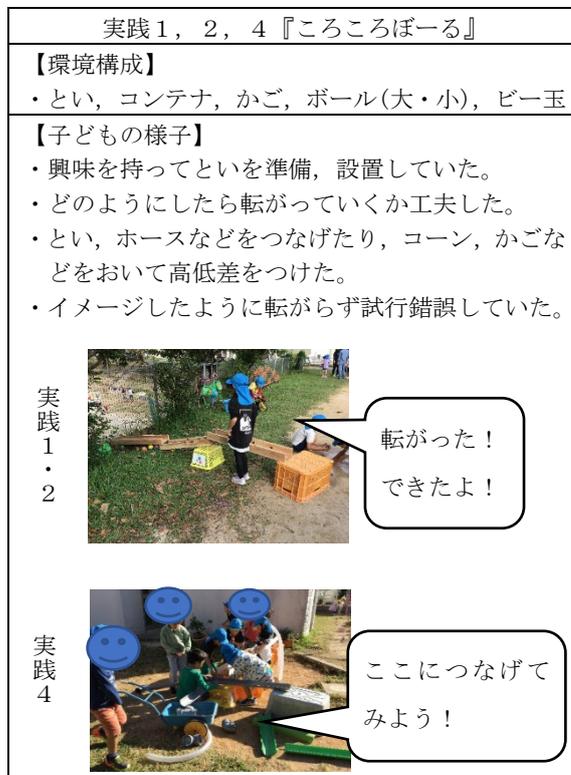


図6 コース作りを試行錯誤している様子

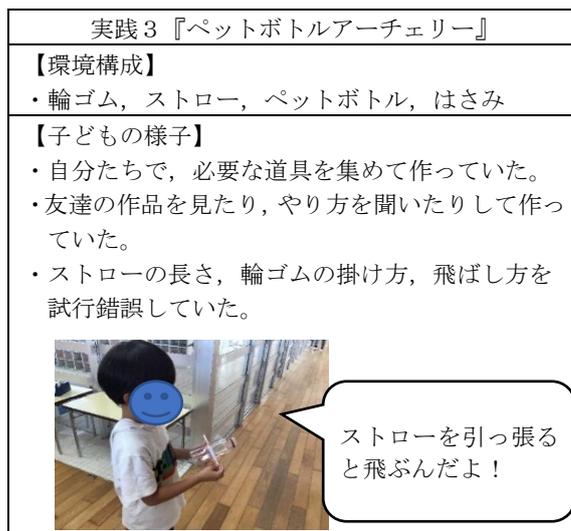


図7 ペットボトルアーチェリー作りの様子

(2) 遊びが深まる環境構成と援助

ビー玉転がしで、高さをつける土台として、コンテナ、かご、カラーコーンを用意したり、長いコースを作るのではないかと考え、色々な長さのといを用意した。また、必要な物を取り入れることができるよう道具をまとめて置いた(図8)。

実践5では、トラック、カラーコーンを土台にして、といを置き、子ども達は必要に応じて、自ら考え、色々な物を遊びに取り入れる姿が見られた。「この道具はこう使える」「これも使ってみよう」などと話す姿からは、これまでの経験や知識を繋ぎ合わせ、自分のイメージに近づけるよう工夫をしている姿があった(図9)。

このように、子どもの興味、関心を把握し質の異なる道具を用意したことで、自らその環境に関わり、試行錯誤する姿につながったと考えられる。

実践6では、パイプのつなぎ目が合わないことや、といを平坦な場所に設置したため、中々ビー玉が転がず、コースの最後まで転がすという、やりたいことがうまくいかずにいた。そこで、保育教諭が「こんなやり方があるよ」と伝えたり、励ますなどの援助をすると、つなぎ方が分かった。また、実践9では、友達がといを傾けるとビー玉が転がりやすくなると話したことで、新たな気付きになり、試行錯誤していく姿に肯定的な声かけをしていったことで道具や物の性質に気付く姿が見られた(図10)。

このように、ビー玉が転がらないという困った様子を、子ども達のやりたいことを整理したり、思いをしっかり聞き、難しさに共感するなどの援助をしたことで「どうやったらできるだろう」「こうしたらできるかもしれない」という意欲につながり、試行錯誤する姿につながったと考えられる。

これらのことから、意図的な環境構成や援助の工夫をすることで、物の性質や仕組みに気付き、遊びを深めていくことができたと考えられる。

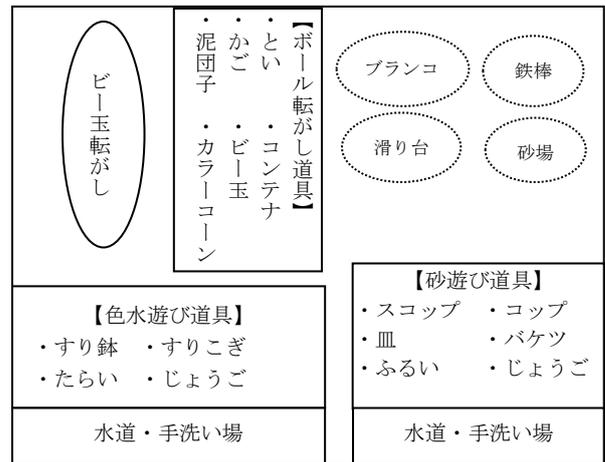


図8 道具の配置図



図9 試行錯誤している様子

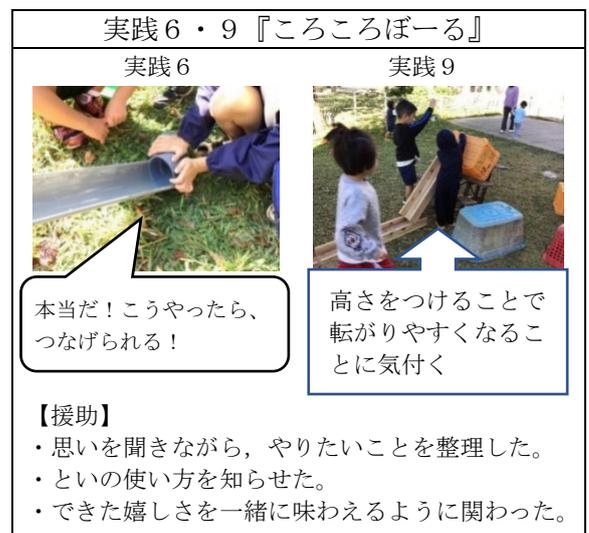


図10 道具の使い方に気付くことができた様子

実践7では、ふるいを使って細かい砂を集めることに興味を持っていた(図11)。そこで、現在使っている物より、目の細かいふるいがあると、もっと細かい砂を集めることを楽しむのではないかと考え用意した。

目の細かなふるいを使うと砂の細かさに驚きと感動する声が聞かれた。虫眼鏡を使って、砂を観察する子がおり、砂の粒の大きさの違いに気付く。ふるうだけでなく、指で押し込むことで砂が落ちていく発見もあり、「めっちゃ良い感じ」「サラサラになってきた」と話す。

このように質の違う道具を用意することで、子ども自身が色々な道具を遊びに取り入れ、気付きの質の変容が見られた。



図11 ふるいを使った遊びの様子

2 作業仮説(2)の検証

サークルタイムや掲示物を通して、互いの考えを伝え合い、遊びの見通しや振り返りをする中で、遊びに広がりや深まりが見られ、探究する活動を楽しむだろう。

(1) 遊びが広がり、深まるサークルタイム

サークルタイムを通して、子ども同士の対話を促し、自分の考えを伝える嬉しさ、友達の考えを聞くことで新しい気づきが生まれるなど、自分の考えをよりよいものにできるよう関わった。

実践5ではサークルタイムで、ビー玉転がしについて話し合った(図12)。

実践5『どうやったら転がるのかな?』		
ビー玉転がしで、うまく転がらない子がいて困っており、いい方法はないか保育教諭が問いかけた。		
保育教諭「友達がこんな工夫してたよ。でも、ビー玉転がし、中々転がらないんだよ。何か良い方法知ってる人いる?」		
B児「めっちゃ、こうしたらいいんだよ(といを傾けるように手を動かして表現)」		
C児「早かったけど(試したけど)、ボールいかなかったよ」		
保育教諭「(空き箱をといに見立てて)こういうこと?傾けるといいの?」		
B児「そうそう!坂道(とい)が1個しかなかったから行けないんだよ」		
D児「でも、できなかったよ」		
E児「こうするの?」		
保育教諭「良い方法だね。色々試してみるのもいいかもね」		
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> ジェスチャーで伝えようとするB児 友達に伝わるように色々な動きを見せる </div>		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 友達の話を聞いて、イメージしながら手を動かす。 </div>
翌日、他児がビー玉転がしをする際にE児の「坂道にしないと転がらないよ」というサークルタイムでの会話を思い出し、といを傾けて高低差をつけていた。うまくビー玉を転がすことができ、達成感のある表情が見られた。		

図12 サークルタイムの様子

実践5では、自分の考えを伝えたり、相手の考えを聞くことで、新たな考えを知ったり、友達の考えを取り入れて試してみたことで、ビー玉転がしができるようになった。

このことから、サークルタイムでは、子どもの問いを促したり、共感したり、考えを共有することが遊びを深める上で有効だと考える。

(2) 探究する活動を支える援助

子どもの興味、関心は何かを捉え、子どもの声を聞いて、言語化したり、考えを整理したり、困ったことや感じたことを友達と伝え合えるよう援助した。また、サークルタイムの場を設けたり、作品などを掲示することで対話が生まれ、遊びが広がり深まるよう工夫した。

実践5では、散歩に行くと、虫眼鏡で草や落ち葉、石などを観察し様々な発見をしていた(図13)。化石に詳しい子が「この化石は、サンゴだ。白亜紀の物だな」「これは魚の形してるよ」と、感じたことや知識を伝え合っていた。

その日のサークルタイムで、化石探しの遊びを発表することになった(図14)。友達から質問があり「これはクラゲ」「この形はサンゴ」と、化石の特徴と、自分の知っている知識を繋げて伝えている。その様子を見て、保育教諭が「色々知ってるね。なんか研究者みたい。みんなで研究室作ったら楽しそう」と話すと「良いね! やりたい」と盛り上がり、その後、子どもと一緒にテーブルを用意して、研究室を作り、掲示物コーナーも設置した(図15)。

研究室では、観察、予想、工夫、自分の考えを他者と共有するといった、様々な気づきがあり、掲示物コーナーでは化石を手に取り、じっくり観察する姿も見られた。

調べてみたいという好奇心は、虫眼鏡を使って、園庭の様々な物を見つけて、調べるという姿になった。そして、「段ボールで研究所の建物を作りたい」と製作に対する興味に広がり、「もっとこうしてみたい」という、次への意欲につながっていった。

このことから、保育教諭が意識的に子どもの声を拾い、気づきの質を見取り、考えを整理、言語化することや考え共有していく援助をすることで遊びが深まっていったと考えられる。また、サークルタイムや掲示物を通して互いの考えを伝え合い、遊びの見通しや振り返りを行うことで、遊びに広がりや深まりが見られたと考える。

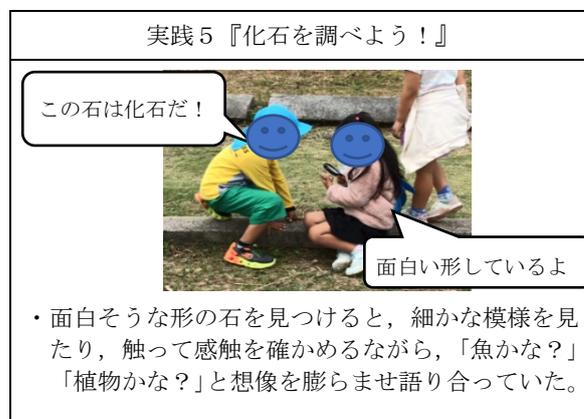


図13 化石探しの様子



図14 サークルタイムの様子



図15 化石研究室の様子

3 幼児理解に基づいた評価

子どもの遊びの中から、どのような気づきや学びがあるのか、3つの資質・能力の視点を踏まえながら指導計画を作成した(図16)。また、様々な方法で幼児理解に基づいた評価を行った。

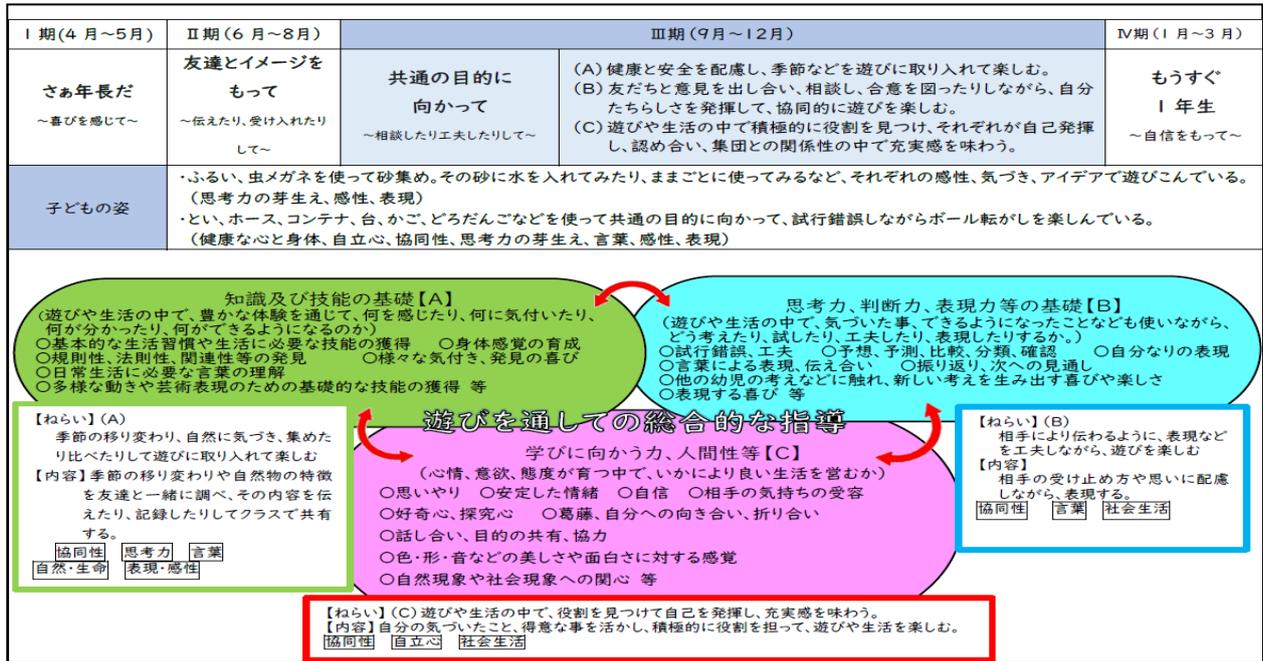


図16 浦添こども園で活用している指導計画(週案)

保育実践を行い、写真や動画を見ながら保育を振り返り、記録をした。また、多様な視点から子どもを理解するために、同僚との話し合いやリフレクションを行った。リフレクションとは、同僚との話し合いで写真や動画を用いて、自身の経験や行動を振り返り、深い理解や洞察を得るための手法である。話し合いの視点として、日頃から3つの資質・能力の視点で、話し合いを行っている。

実践7後のリフレクションでは、子どもの姿の話し合いから、手立てを考え実践した(表5)。

表5の事例から、リフレクションでは、多様な視点から子どもの姿を捉えることができ、今後どのような環境構成や援助をしていけば良いのかという手立てを考えることができたと考える。

このように、日々の記録や同僚との対話から幼児理解を深めたり、自分の保育を見直し改善することにつながった。

また、実践を幼児教育において育みたい資質・能力の視点で捉えた主なものをまとめた(図17)。資質・能力という視点で指導計画を立てていくことで、どのような姿が育っているかを捉えることができ、次の環境構成や援助の手立てになると考えられる。

表5 リフレクションと、その後行った実践

<p>①同僚との話し合い</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3歳児が土で遊んでいる様子を見て、5歳児の子も興味を持っている。泥んこ遊びが盛り上がっていた。 ・土の感触を楽しみ、泥団子の大きさや固さを試行錯誤しながら作る姿があった。 ・水、スコップ、たらいといった道具を使う姿があった。
<p>②話し合いから手立てを考える</p> <p>【環境構成】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・たらい、スコップを増やし、皿、コップ、コンテナを用意する。 ・土を耕しておくことで、土を集めやすいようにする。 <p>【援助】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの気づきに共感する。 ・泥団子を作ったり、ままごとを使うことで、友達や保育者と一緒に楽しさを味わう。
<p>③翌日の子どもの姿</p> <ul style="list-style-type: none"> ・泥団子作りに興味を持ち、たらいやコップに水を入れ、できた泥団子を皿に乗せて飾るなど、色々な道具を取り入れて遊んでいた。 ・水や土の量を調整し、自分のイメージした固さになるように試行錯誤しながら泥団子作りをしていた。

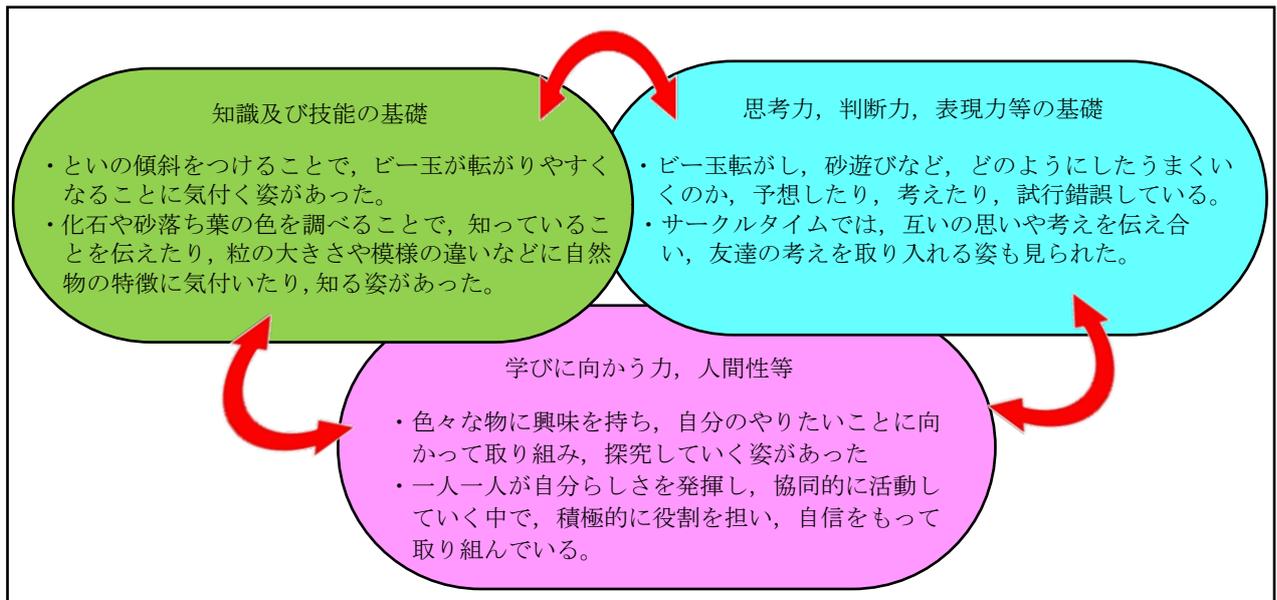


図 17 本実践を幼児教育において育みたい資質・能力の視点で捉える

IX 成果と課題

1 成果

- (1) 子どもの興味、関心を把握し、保育教諭の意図的な環境構成や援助をすることは、子ども自らその環境に関わり、試行錯誤しながら物の性質や仕組みに気づき、遊びを深めることにつながった。
- (2) サークルタイムや掲示物を通して、保育教諭や友達と対話することで、自分の考えを伝えたり友達の考えを遊びに取り入れたりするなど、遊びが広がり、深めることができた。

2 課題

- (1) よりよい環境構成や援助を行うには、物の性質や特徴を理解し、子どもの発達に合う教材を用意するなどの工夫を行う。
- (2) 幼児理解に基づいた評価を行うには、多様な視点から子どもの姿を捉え、資質・能力の視点を踏まえた指導案を立てたり、定期的によりフレクシオンを行ったり、継続していくことが必要である。

【主な参考文献・引用文献】

・内閣府 文部科学省 厚生労働省 (2018) 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』	フレーベル館
・沖縄県教育庁義務教育課 (2023) 『保幼小の育ちをつなぐ黄金っ子架け橋サポートガイド』	
・文部科学省 (2019) 『幼児理解に基づいた評価』	チャイルド
・秋田喜代美 松本理寿輝 監著(2024) 『遊び・学びを深める日本のプロジェクト保育 協働探究への誘い』	中央法規
・高山静子 (2021) 『改訂 環境構成の理論と実践』	郁洋社
・無藤隆 (2009) 『幼児教育の原則』	ミネルヴァ書房
・無藤隆 監修 (2023) 『子どもの発達からみる「10の姿」の保育実践』	ぎょうせい
・大豆生田啓友 編著 (2018) 『遊びから学びが生まれる動的環境デザイン』	学研教育みらい
・大豆生田啓友・豪田トモ 著 (2022) 『子どもが対話する保育「サークルタイム」のすすめ』	小学館
・佐伯胖 (2007) 『共感 育ち合う保育のなかで』	ミネルヴァ書房
・子どもと保育総合研究所 (2013) 『子どもを人間としてみるということ』	ミネルヴァ書房
・利根川彰博 著 汐見稔幸 解説 (2017) 『好奇心が育む学びの世界』	風鳴舎
・加藤繁美 (2023) 『保育の中の子どもの声』	ひとなる書房
・宮里暁美 (2020) 『思いをつなぐ保育の環境構成』	中央法規出版